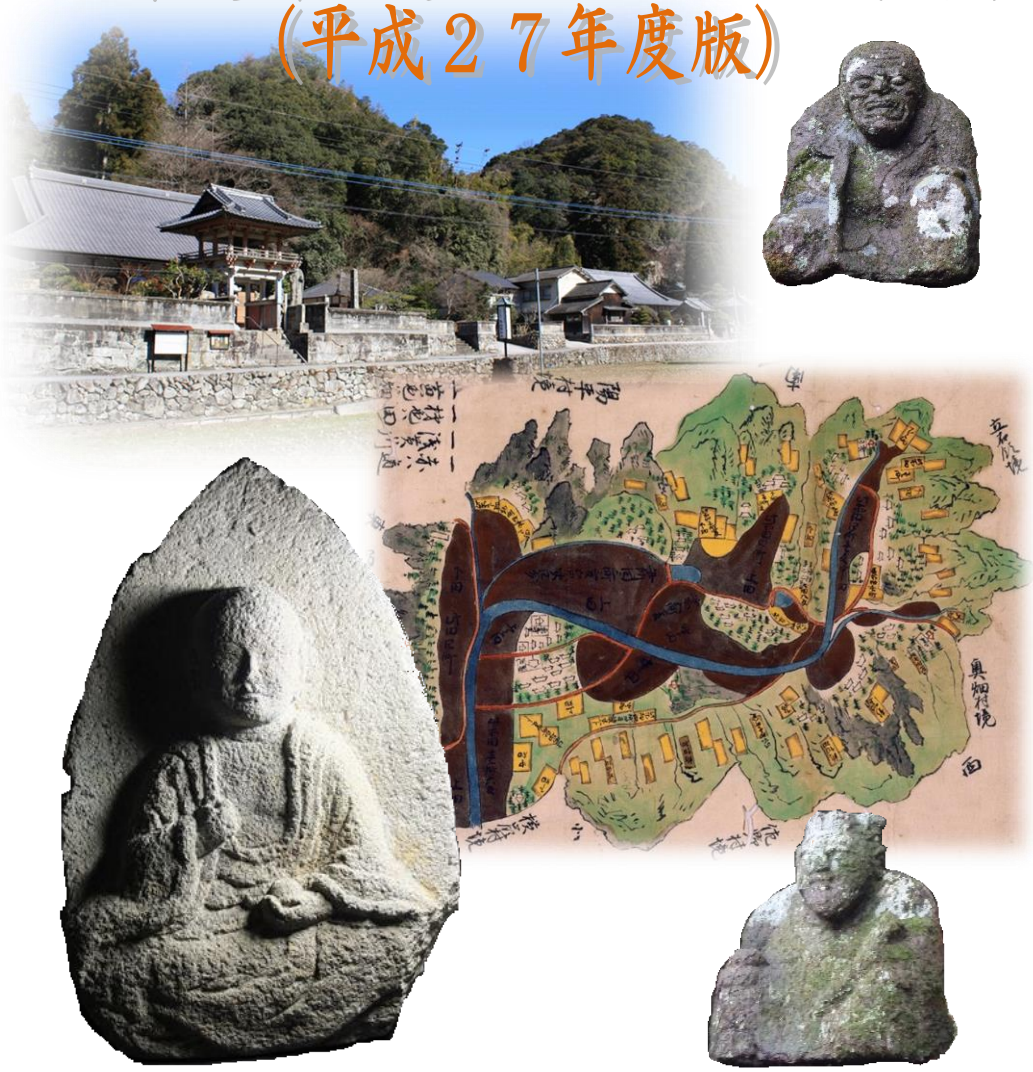
郷土の文化財探訪バスツアー　第６弾

# 今年度新指定となった文化財巡り（平成２７年度版）



平成２８年　３月１９日（土）

豊後高田市教育委員会

**表紙：今年度新指定の文化財**

## （１）本日の行程

０８：４５　豊後高田市役所正面玄関前　集合、受付

０９：００　出発

０９：２０　大分県立歴史博物館着

- 田染荘の村絵図（新・市指定有形文化財）
- バックヤードツアー
- 時間があれば、常設展示などを見学

１０：５５　大分県立歴史博物館出発

１１：３０　富貴寺着

- 富貴寺地蔵石仏（新・市指定有形文化財）
- 富貴寺十王石仏　附　奪衣婆石仏及び地蔵石仏（新・市指定有形文化財）

１２：１５　昼食・休憩【蕗の薹】。

１３：００　富貴寺出発。

１３：４０　六郷山夷岩屋の寺社境内着

- 六郷山夷岩屋の寺社境内（新・県指定史跡）
  - 霊仙寺　・実相院　・六所神社
  - 霊仙寺旧墓地
- 県の審議会で特に評価をされた３つのポイント
- 【文化財ニュース】耶馬フォトコンテストについて

１４：４０　霊仙寺出発。

１５：３０　帰着、解散

## こんなに沢山！文化財の種類

〇文化財体系図及び市内の文化財位置付け

〇現在、豊後高田市には１５件の国指定文化財（1 件の選択、１８件の登録）５３件の県指定文化財（２件の選択）、１３９件の市指定文化財があります。



## 滅多に見られない本物の田染荘の村絵図！

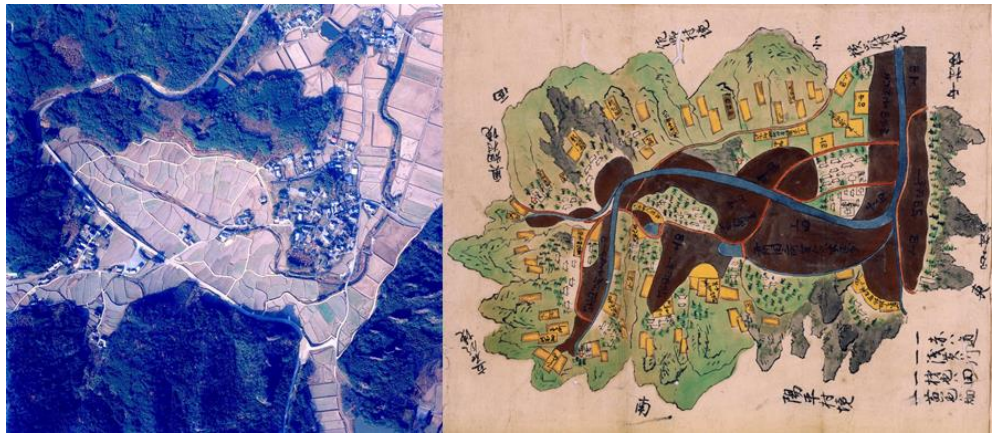
〇田染荘の村絵図（指定日：平成２７年７月２９日）

田染荘の村絵図は、島原藩が田染地域を含む豊後高田を領土とした際に、田染地域の各村の状況を知るために作らせたものです。田染地域の１６ヶ村の内、豊後高田市田染支所に１４点が伝わっていました。

現在伝わっているものは、天保７（１８３６）年に作成された写しですが、元禄２（１６８９）年に描かれたものが元になっています。そのため、江戸時代初期における田染地域の状態を知ることができ、大分県立風土記の丘歴史民俗資料館（現・大分県立歴史博物館）による田染荘の調査の際には、特に重要な史料として扱われました。

平成２２年に国の重要文化的景観に選定された「田染荘小崎の農村景観」の審議会の中でも、村絵図と航空写真との比較によって、田染荘小崎地区の景観が江戸時代から殆ど変化していないことが分かることが、最も重要な選定要件の１つとなりました。

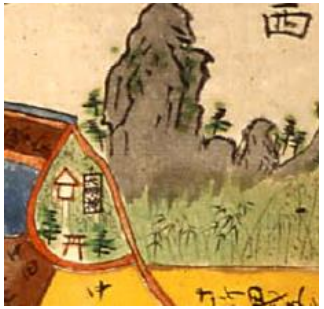
〇航空写真と絵図の比較（田染小崎の場合）

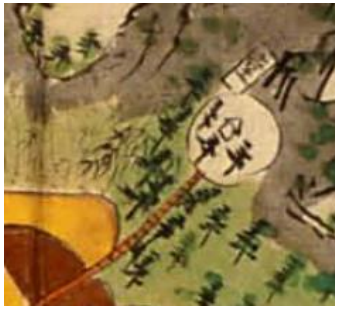


## ○田染荘の風景がよみがえる

村絵図をよく見てみると、かなり細かい部分まで写実的に捉えていることが分かる。植物一つとっても①針葉樹系（松・杉など）、②広葉樹系（種類不明）、③竹や小笹、④苔類、⑤大松の５種類が描き分けられ、耶馬と呼ばれる岩峰の風景も写実的に捉えられています。

普通の家屋に加え、社寺、岩屋も描かれています。地域を代表する神社・寺院の一部には鳥居や石段も描かれています。





絵図の後には、帳簿と奥書が記されています。帳簿には水田や畑の広さや灌漑方法、人口や牛馬の数、百姓の家職、山公事（山の営みに発生する税）、鉄砲の数などが記されています。

奥書には凡そ「前回の絵図差出（元禄２年）から天保７年にかけて変わった場所があれば、掛紙（薄い紙を絵図に重ねる）を付して差出せと申し付けられたので、取り調べたところ何も変わったところは無かった。」と書いてあります。



# 富貴寺の歴史を語る石仏たち

## ○富貴寺地蔵石仏（指定日：平成２７年１０月３０日）

舟形に整えられた石に浮き彫りされた富貴寺地蔵石仏は、後背に「応安元（１３６８）年乙（２）月一日　願主王盛久」と文字が刻まれており、南北朝時代に制作されたことが分かっています。

末法思想が流行する中、極楽浄土を志向した人々の信仰の中心であった富貴寺には、地獄に堕ちた人間を救ってくれるとされた地蔵菩薩は深く信仰されていました。

## ○富貴寺十王石仏　附　奪衣婆石仏及び地蔵石仏（指定日：同上）

富貴寺大堂の西側、県指定の笠塔婆の後ろに並べられた１２点の石仏も、同時に指定されました。これらの石仏は作風から全て南北朝時代後期（大堂内の地蔵石仏よりは新しい）の制作と考えられています。

十王とは死後の世界において人間の罪を計る存在で、閻魔大王がよく知られています。源信の『往生要集』以降、生前に十王を信仰することで罪を軽減できるという「預修」が流行し、その考え方は中世以降、国東半島にも持ち込まれました。

一番右側の奪衣婆石仏は、日本では閻魔大王の奥さんとされており、六文銭も持たずに三途の川を泳いで渡る亡者の衣服を奪い、衣領樹という木に吊るして罪を計ります。

十王と奪衣婆はよく同時に祀られますが、市内では一括して揃っている場所は他にはありません。

一番左側の地蔵石仏は、大堂内のものとは違って、全体を立体的に造っています。地蔵菩薩は日本では閻魔大王と一体であると考えられていましたので、十王石仏の隣に安置されていると考えられています。

【文化財コラム】「死後の世界」の変遷史

仏教が本格的に日本に受け入れられる前の「死後の世界」は、「どこか遠くへ行く」というものでした。古代神道に見られる「地下世界（黄泉の国）」「山中他界思想」がその代表です。

仏教的な「死後の世界」が広まると、帰依・信仰したものは、四方の浄土に向かうとされ、西方を目指して「南無阿弥陀仏」が定着し、南方を目指す「補陀落渡海」が行われました。同時に、各方向を代表する仏様を信仰するようになりました（㊤阿閦・薬師㊨阿弥陀㊦宝生・観音㊧不空成就・釈迦）。

平安末になると、源信『往生要集』が流行し、「厭離穢土／欣求浄土」が唱えられると、人々は死後「六道」に振り分けられ、人間道以下の世界（修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道）では、それぞれの苦しみを味わうとされました。その為、六道をそれぞれ見守る「六地蔵」「六観音」信仰が流行し、閻魔大王の本地仏とされた地蔵菩薩への信仰が根強くなりました。



## 六郷山夷岩屋の寺社境内の３つのポイント

**○六郷山夷岩屋の寺社境内（指定日：平成２８年２月９日）**

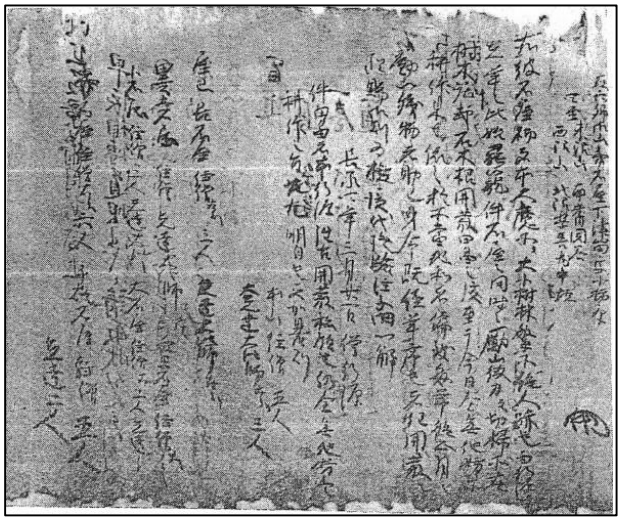
市指定史跡「霊仙寺一帯」は、県指定史跡「六郷山夷岩屋の寺社境内」へと生まれ変わりました。新規の県指定は２０年振りになります。

指定名称が変更になった理由は、霊仙寺は夷岩屋の末坊が寺院化してできた呼称にすぎず、実相院・六所神社・旧墓地、その先へと広がっていた夷岩屋全体の評価をするにはあまりに狭い範囲を示しているという事である。

**○「六郷山夷岩屋の寺社境内」が特に評価された３つのポイント**

**①六郷満山でも最古級の古文書「余瀬文書」の登場寺院である**

余瀬文書は元々長小野地区の庄屋を代々務めた余瀬家に伝わっていた古文書であり、六郷満山の最古史料でもある。特に古代には「大魔所」と呼ばれた夷地区で、僧・行源が仏事の傍ら耕した土地について、満山大衆の承認をもって寺領化する事を願い出た文書「夷住僧行源解案」は、古代の六郷満山の様子を知る一級史料である。



【ここが POINT】

実は平安時代以前の六郷満山、特に発展期の様子については、詳しく分かっていません。

余瀬文書は中世の「夷岩屋」について、平安～戦国時代まで途切れなくその開発・仏事の様子を如実に伝えている点が非常に重要です。

六郷満山の組織についても、余瀬文書の検討により、多くが分かりました。

**②中世石造物が濃密に分布し、中世六郷山の遺跡が良好に残存している**

実相院国東塔・板碑（南北朝時代）や、霊仙寺板状五輪塔など中世段階の石造物が数多く残されている。更に巨大な岩屋の下に造られた六所神社本殿には旧講堂のものと思われる礎石が残り、谷川に沿って横長に伸びる伽藍配置は、天念寺など西国東に多く見られる。

国東塔

板状五輪塔

巨大な岩屋の中の六所神社本殿

**③墓地の位置や造り、磨崖の文化など、夷地区の特徴が十分に出ている**

霊仙寺では墓地が川を挟んだ位置にあり、川沿いの傾斜に薄い石を敷き詰めた段差を作り出している。墓地を夷耶馬に取り入れ、磨崖五輪塔・磨崖碑などを作り出すのは、梅ノ木磨崖仏などとも共通する夷地区特有の墓地文化である。

霊仙寺旧墓地

梅ノ木磨崖仏



**・職人達を多数輩出した夷谷**

夷谷は多くの職人を輩出した土地でもある。

鎌倉時代、院の御番鍛治・紀行平が夷の出身であると伝えられ、鬼ヶ城の岩屋に籠って刀剣を鍛えた伝説が残っている。院の御番鍛治で九州から徴集されたのは行平のみである。作品としては、永青文書所蔵の国宝の太刀、県内では歴博に県指定有形文化財の太刀（下写真）が残されている。

江戸時代後期には板井派仏師がその作品を多く残している。板井派仏師とは板井国光をはじめとする仏師の家系で、比叡山から法橋位を授かっている。作品としては、霊仙寺の石造仁王や石造地蔵尊など石仏が有名であるが、長安寺鬼会面・影堂岩屋千手観音など木彫の作品も多い。

**・風光明媚な名勝「夷谷」**

夷谷では山水画のような風景に魅せられた人も多い。

特に有名なのは、日本で最初の数学の教本「塵劫記」を出版した吉田光由であり、彼は夷の風景を気に入って住むようになり、稽古庵という塾を開いたと言う。古い版の「塵劫記」や吉田光由の墓所が夷に残っています。

また、江戸時代後期には、国学者・高井八穂が「夷谷八景（楽庭櫻花・藤谷藤花・夷川蛍火・高城秋月・大平峯雪・霊仙晩鐘・車橋夜雨・六所宮燈）」を定め、和歌などに詠まれることが多くありました。

「霊仙晩鐘」の霊仙寺楼門

【文化財ニュース】来年度は「耶馬フォトコンテスト」開催！

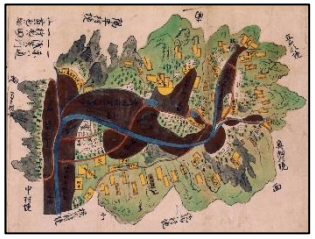
国東半島の各所で見られる「耶馬」。元々は江戸時代の思想家・頼山陽が中津市・山国谷を訪れた時に、その景色を「耶馬溪天下無」と漢詩に詠んだことにはじまり、火山岩質の奇岩の連続を「〇〇耶馬」と呼ぶようになりました。

市内でも多くの耶馬が江戸～明治時代に奇勝として取り上げられるようになり、「夷耶馬」「天念寺耶馬」「田染耶馬」「鬼城耶馬」「黒土耶馬」などが親しまれてきました。

豊後高田市では、これらの耶馬の文化的価値を見出し、保護・活用の前段階として、普及啓発を行いたいと考えており、耶馬のフォトコンテストを開催します。各耶馬の優秀作品はパンフレットに掲載され、商品も用意しています。奮って応募ください！

## 本年度新指定となった文化財リスト

### 田染荘の村絵図【市・有形文化財】



田染荘の調査の際、最も基本的かつ重要な歴史資料として扱われた村絵図。水田や河川、道は勿論のこと、山・岩峰・社寺・人家にいたるまで詳細に描かれている。特に小崎地区の絵図は現在の航空写真と比較しても殆ど変化していない。

### 富貴寺地蔵石仏【市・有形文化財】

富貴寺大堂の中に安置される石仏。浄土思想と結びつきの強い地蔵信仰の産物ではあるが、いつごろ富貴寺に移動して来たかは不明。後背に銘があり「応安元年（1368）」に「王盛久」なる人物の発願で作られたことがわかっている。

### 富貴寺十王石仏　附　奪衣婆石仏及び地蔵石仏【市・有形文化財】

富貴寺大堂の西側に一列に並べられる南北朝時代の石仏群。十王石仏は全て揃っているが、磨耗も激しく、全てにおいて尊名ははっきりしない。奪衣婆石仏・地蔵石仏も合わせて、大堂内の浄土の世界と対比させる為に安置されたと考えられる。

### 六郷山夷岩屋の寺社境内【県・史跡】

夷地区一帯を境内とした夷岩屋の内、霊仙寺・実相院・六所神社・旧墓地は境内の中心地と考えられ、南北朝以降の中世石造物や、古文書に裏付けられる地形・地名が濃密に分布している。半島北部に分布する磨崖五輪塔も多く見られる。